

ふじ誕生の軌跡

現在、りんごの品種の中でもメインとして知られている「ふじ」。その人気振りはアメリカやニュージーランド、中国などの海外でも生産されるほどである。

ふじの誕生は、1939年藤崎町にある当時の園芸試験場東北支場にて、「デリシヤス」の花粉を「国

北7号」として選抜された。

その後、1962年3月6日に、東京銀座千疋屋において東北7号の試食会が行われ、「歯触りがよい」「水分が多くモサモサしない」「甘味が多い」と言った感想が出され、好印象が多かったようだ。

終了後命名について話され、当時千疋屋の齋藤義政社長から「ラッキー」という名前も提案されたよ

ふじの栽培確立への道

当時ふじは味が濃く、甘さもあり直感的に良いと思われていたが、その反面着色が悪く、形も整わず保存性が悪い為、増殖に踏み切れない状況であったことから一時は見捨てられる事態にまで及んでいた。

その時、ふじを確立するために

不動のメイン品種「ふじ」

ふじ生誕80周年

光」のめしべに交配した育種試験から始まった。

この組み合わせから274個の果実を収穫し、この収穫した果実から採れた2004粒の種を植え付けたところ、968本の実生が育った。

この実生が初めて実を付けたのは1951年であり、7年間の試験検討を重ね、1958年に「東

うだが、日本に生まれた世界一級品の品種、日本を代表する秀峰富士の広さにあやかり普及してほしい等の願いを込めた事と、発祥の地である藤崎町が関連した「ふじ」が命名された。当時、その会に初代ミス日本であった女優の山本富士子氏が参加していたことも一因といわれている。

立ち上がったのが、後にふじの育ての親となる齊藤昌美氏と、スターキングデリシヤスの普及で実績のある青森県育種同好会副会長の対馬竹五郎氏である。

2人の強いふじに対する確信から、根気強く3年を費やし着色、貯蔵性の改善に研究を重ね、ようやく合格点を得られたことから、



岩木山の恩恵を受け実る管内のふじ



ふじの普及に尽力した齊藤昌美氏

現在のふじの地位を確立する事が出来た。

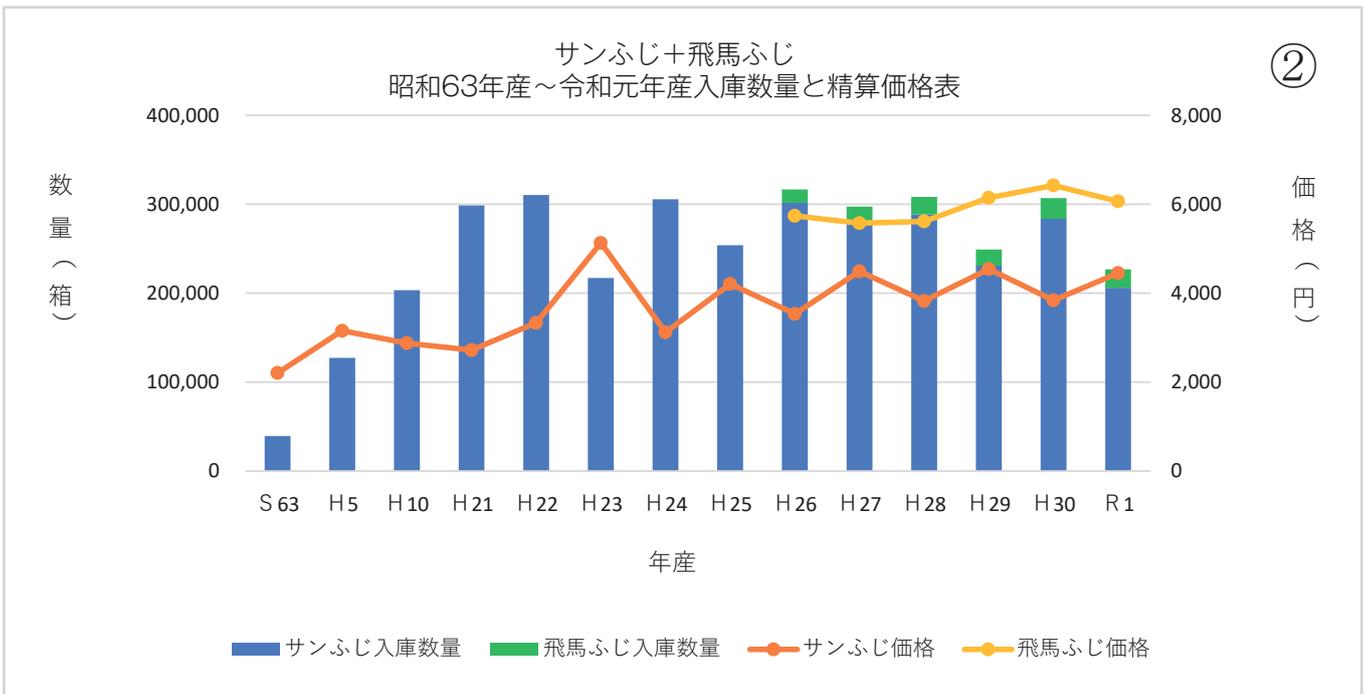
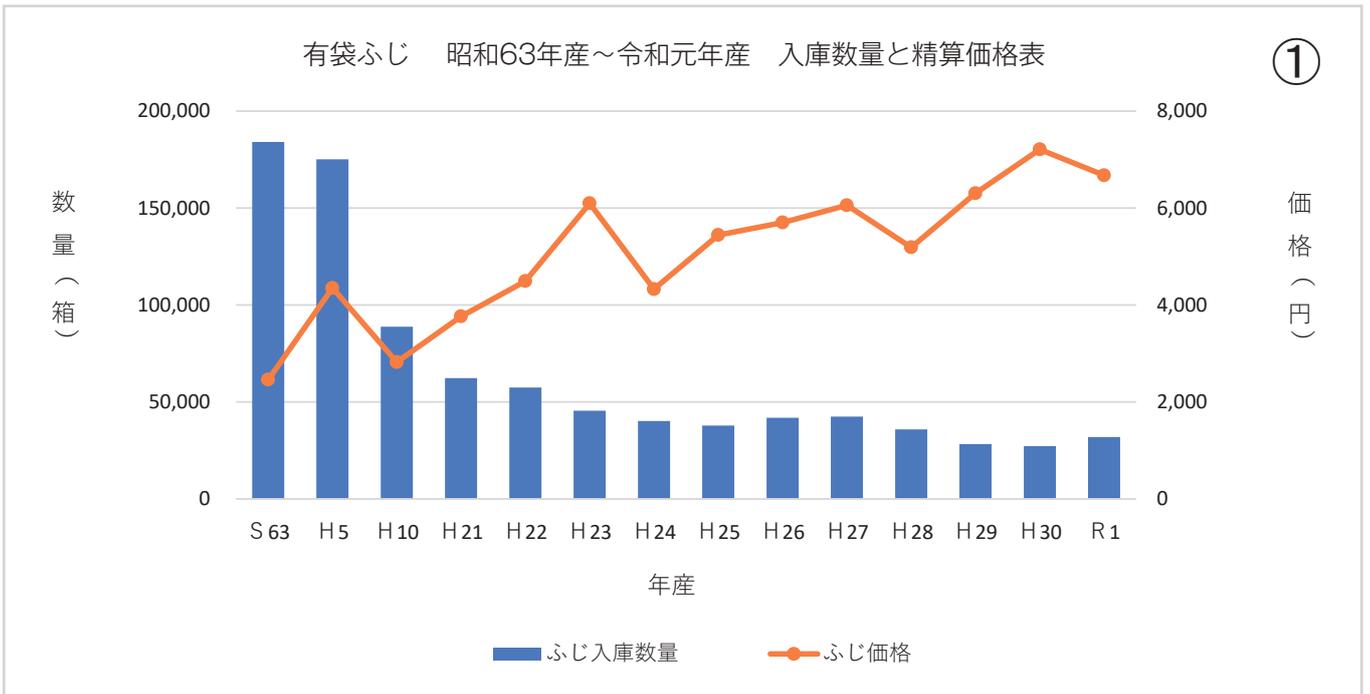
ふじの生産と需要

かつては効果のある農薬が無かった為、ふじに袋を掛けて病害虫から守ろうと有袋ふじを推進していた齊藤昌美氏。だが味のばらつきがあり、さらに経費と労力を費やす必要があったため、有袋ふじの生産数量は衰退していった。

当JAにおける有袋ふじの入庫数量も、下表①を見ると分かるように平成30年産まで減少を辿っている。

しかしこれは有袋の場合であり、サンふじの場合だと、隔年結果や気象等により変動があるが、一定に推移している。

管内の生産者の方々に有袋ふじの生産について話を聞いてみると、「袋を掛ける時間がない」「資材や労力がよりかかる」などの意見が多い。このことから有袋ふじの生産量は減少し、貴重な有袋ふじとして値段は近年60000円を上回っている。



サンふじに関して前ページ表②をみると、精算価格は上下を繰り返している。有袋ふじとは逆に袋を掛けずに葉取りと玉回しの作業が良い為、比較的労力は少なく生産しやすい。よって生産量は30万箱前後を推移している。

現在では、糖分の供給源である葉を摘まずに、より食味を重視した葉とらずサンふじを栽培する生産者が増加傾向であるほか、着色優良系統ふじに品種更新をする人も多くなっている。一方、土壌からこだわり、りんごの生理生態に合った作業で濃厚な食味を目指す「飛馬ふじ」の生産者も増えている。前ページ表②をみると精算は常に6000円前後をキープしており、こだわりサンふじとしてブランドを確立している。

このようにふじは無袋で食味にこだわった蜜入りサンふじから、長期保存し春過ぎに販売する有袋ふじ、こだわり栽培サンふじや葉とらずサンふじ等まで様々な顔を持つアイテムとして重宝されている。



葉を取らずに着色させた葉とらずふじ



こだわり栽培により消費者からの人気が高い飛馬ふじ

ふじの将来性について

ふじはこれまでに世界のふじとして注目を浴び、世界中で栽培されている。さらに販売に関してもふじの全国の取り扱いは約40%と半分に近づいているという。これからふじはどのような販売になっていくのか、販売担当者に聞いてみた。

結果から言うと、これからさらに注目を集めていくのではないかといい事であった。地場ものを多く取り扱う市場であっても、先に地場産のふじを売り、次に青森県のふじを販売する程ふじのニーズは高いようだ。この販売の流れは長い間続いているという。

また、以前まではジョナゴールド等の品種を主に並べていた店舗が、最近ふじの棚で賑わいを見せているという。近年ではふじの販売に力が入ってきているという県もある。

どの店舗でも試食販売を多く行っていると、ふじの甘味と酸味、シャキッとした食感に好印象をもつ消費者の方が多いという。台湾

や中国などでもこれらの反応は同じなようだ。

どこの市場もふじの販売ピーク前とピーク後では市場の賑わいが180度違うという。

ふじに対する美味しさや認知度の高さ、栽培に関する信頼性から、ふじはりんごの中でも別格となっている。

今後もふじのニーズは高まり、これからも高まってくるのではないかと推測される。



試食販売により消費者をぐっと引き寄せる

5年10年先のふじの生産

販売担当者は、ふじの生産量が全国的にみると今後減少すると推測している。それを食い止めることが出来るのは青森県だけだと言っている。

その理由として、他県に比べると生産者の年齢が比較的若い方なので、体力、気力がよりある事や、これまで先人が築き上げてきた栽培方法を長い年月を掛けて展開していく事が出来る要因が上げられる。先般開催された当JA精算報告会などでも、販売担当者は「ふじを頑張つて作ってください。ふじの生産減少を食い止めるのは生産者の皆様です。」と力強く述べていた。

また、ふじの生産持続に伴って、最も重要と言われる剪定技術の研鑽も意識していかなければならない。

収穫期にそのまま結果として表れるふじの剪定。

ふじは糖度が上がり、玉の大きさも確保するとなると枝が衰弱しやすい品種であり、「ふじの剪定

を制する者はりんごを制する」と言われるほど難しいとされている。多少違った剪定を行うと、徒長枝を伸長してしまうなどの高品質生産に支障が出てしまい、さらに後の作業にも労力が増加してしまつ。ふじの親である国光は下がり枝に良いりんごが成りやすいという事と、スターキングは張り枝に良いりんごが成るといふ事の二つのポイントを押さえて、他の枝でコントロールしながら剪定することも重要だと齊藤昌美氏は言っていた。



ふじの剪定技術を共有

これからも「ふじを制する者はりんごを制する」という精神を胸に剪定技術の研鑽に努めていかなければならない。

生産者にふじに関して色々聞いた

ふじはりんごの品種の中でもずっと先頭を走っている品種だ。中生種など色々な新しい品種が開発され、栽培している人がいるが、最終的にはふじにたどりつく人も多いはず。これからもメインの品種として経過していくのではないかと思っている。

(五所地区50代男性)

ふじ、王林、ジョナゴールドと昔からある品種は未だに人気のある品種として注目されているのは、長い年月が経っている分技術も磨かれ、品質的にも良品質なものが多くなっているからなのではないかと思っている。

(紙漕沢地区60代男性)

りんごの中でも幅広い年齢層に一番浸透している品種がふじだと感じている。

これからも人気を維持してい

くのではないかと感じている

(前相馬地区30代)

これまでふじ誕生から現在のふじを振り返つたが、数多くの苦難を乗り越えふじの可能性を信じてきた齊藤昌美氏をはじめ、先人の方々の努力はこれからも引き継いでいくべきである。当管内の生産者も「ふじに勝る品種無し」と、ふじに対する熱い気持ちを持った方が多い事を感じた。

誕生してから80年間主力品種として位置してきたふじ。今後このふじを超える品種が出てくるかどうかは分からないが、消費者に「おいしくりんご」として広く認知されるふじの栽培に磨きを掛け、不動の座を更に確固たるものになる様、産地として改めて気を引き締めていきたい。

【参考資料】

・藤崎町観光情報サイト ふじの歴史

・りんご百年史

・青い森の片隅から

・りんごを拓いた人々